

この世界には、今までいろんなウイルスが
やってきた。インフルエンザウイルスには、
みんなも一度は会ってるよね。
いたずらっ子のようなウイルスなら、一緒に
いても平気だし、くちばしでつついてやっつ
けることも、アツカンベーして逃げることも
できた。



でも、^{いま}今、この^{せ かい}世界に^{あらわ}現れたコロナウイルス
は、^{しにがみ}死神のような^{おそ}恐ろしい^{かお}顔をしている
^き木の^{うし}後ろにかくれても、^{いけ}池の中にも^{なか}ぐっても、
あの^つ突きささるような^{するど}鋭い^め目で見つけられ、
つかまってしまふ。



コロナという言葉を見かけてから1年もたないうちに、仕事の中で、また友人知人との個人的なやり取りの場にまで、その言葉がゴロゴロと転がり出てきた。

そんな不安な時代を冷静に受けとめたいと思っていた時に、スタシスからコロナウイルスを描いた作品がメールで送られてきた。web上で、イギリスの映画監督ピーター・グリーンウェイと始めたようだ。

肩書きで見ると、スタシスは、蔵書票、絵本、ポスターなどで輝かしい受賞歴が多くある世界的なアーティストだが、平面作品だけでなく、彫刻、インスタレーション、パフォーマンス、演劇、舞台装置、映画など立体や身体表現でも活躍していて興味深い。

コロナ時代になる前から、スタシスには「MASK」、或いは「musk」という表記のタイトル作品が多い。しかし、そのマスクは、ほとんどが〈仮面〉という意味で使われていて、口を隠しているものは、ほとんどない。でも、最近、日本の私たちが使う意味での「マスク」作品も増えてきた。それでスタシスの作品に文をつけた『アウスラさんのみつあみ道』（石風社）や『スタシスさんのスポーツ仮面』（岩崎書店）などを作った私は、〈コロナ／マスク〉をテーマに絵本が作れないかと思ったのだ。

スタシスの作品は、グリーンピース出版会の『クレセント・ムーン』（1990）、ほるぷ出版の『ながぐつをはいたねこ』（1991）と『ながいおはなのハンス』（1991）、シードホール編集『スタシスの仮面——遙かなるリトアニアへ』（1991）（1987年のシードホールでの展覧会図録）など1980年代後半～1990年代前半に日本で多く紹介されている。また、第4回世界ポスタートリエナーレトヤマ（1994）で金賞を受賞し、亀倉雄策や田中一光に絶賛されている。

作品の独特な雰囲気魅せられていたものの、私がスタシスに連絡を取ったのは、共編著『ブック・アートの世界——絵本からインスタレーションまで』（水声社、2006）で、スタシスの写真作品《読書する人》を取り上げるためだった。この作品は、大人になったハンスであろうか、長いとんがり帽子をかぶり、長い鼻で絵本『ながいおはなのハンス』のページを押さえて読んでいる男性を写した写真である。うらわ美術館の「ブラチスラバ世界絵本原画展」（2004）で、長い瓶の中に長い鼻をつっこんでいる《出会い》、紐を体に張った《固定した人》などと一緒に展示されていた。絵本原画展でありながら、私は絵本ではないこの身体表現写真作品に一番、興味を持ったのだ。

スタシスの作品が面白いのは、様々なジャンルを横断し、素材、技法などが、驚くほど多様なためである。そのため、マスクのみの絵画を扱った画集にしようかとも考えたが、それよりも様々なスタイルの作品を使って、コロナという時代を解き明かすものになりたいと考え、データで持っていた過去の作品も引っ張り出したのである。

この本のためのスタシスの2020年作と思われる新しい作品は18点、1976年、1983年、1989年、1990年、1998年、2001年などの古い作品は22点で、作品の半分以上が以前のもので、コロナを主題としたものではない。でも選んでみると、どこか現在のコロナの世界状況を思わせる作品が多いのに驚いた。例えば41ページで三日月が縛り付けられている絵は、今の時代の同調圧力や自粛警察をも想像させる。また45ページの医療従事者のために選んだ作品タイトルは《苦行》であり、人物が厚手のビニールの衣服を纏っている。最終画面で、スタシスが林の中で線描の家を持っている姿も含めて、人間の生き方、人間が作り出すものなどを思考する一つの文化論としてもご覧になって、子どもたちとも話し合っただけであればと思う。

なお、この本の制作にあたり、二点、お断りしなければならない。一つは、文字が入っている展覧会案内のポスターなどの作品から、展覧会名、美術館名や開催期間などの文字を取ったことである。もちろん、スタシスの許可をいただいていた。ただ、文字が大きくデザインの要素となっている作品(27ページ)では、削除することなく、そのままにしている。

また、ユダヤ人の命を救うためにパスポートを発行した杉原千畝へのオマージュ作品(55ページ)を、鳥が子どもの手紙を持って羽ばたいていく画面というように、文字を取り、作品の意味を変えたページもある。

二つめは、スタシスの名前の日本語表記についてである。スタシスは、リトアニアで生まれ、ポーランドに住んでいるが、大使館などで日本語表記を訊ねると、同じ国の人でも異なる文字列を言い、そのせいであろうか、日本で出版されている本の場合も、その表記は必ずしも統一されてはいない。私はリトアニア人で日本近代文学の研究者のユルギタ・ポロンスカイトの説に従って「スタシス・エイドリゲーヴィチュス」とした。

なお、ポーランド広報文化センターの久山宏一氏にお願いし、画像データのことなどでスタシスと詳細な連絡を取っていただいた。突然のお願いを快く引き受けてくださった氏のおかげで、この本はできた。感謝に絶えない。